

吉田 真人

2019年7月に入会して以来、書いり会への投稿が62編に達した。殆どが海外駐在時代もしくは海外出張や海外旅行時の経験や見聞に関するものである。主題が国内であるものは10数編に過ぎない。

最初の投稿は『赤の広場の百貨店』。ソ連時代のお上りさんのおばさん達がメインテーマで、彼女達の風貌を「たけ*」のように近くにいのだけ安心できる」と書こうとして字数が足りなくなり、仕方なく「ぱつちやり」と書いた。800字に纏める」とは難しい。

今は無い国をテーマにしたもう一つの原稿が『チーチックボイントチャーリー』。東ベルリン訪問記である。帰途、西ベルリンにあつた当時廃墟の旧日本大使館跡を通りかかり、超ミニスカートのお姉さん達に手を振つてもらつたのは楽しい記憶だ。(その後大使館は元のこの地に復帰、お姉さん達はもういない)。

食べ物についても幾つか書いた。『ドイツ初夏の味覚』は、シュバーゲル(白アスパラ)を会社の対面にあつたデパ地下の食堂で堪能した話。給仕兼会計のおばさんに顔を覚えられ、着席と同時にピノグリジオがサーブされる。

『欧洲冬の味覚』は、ベロン種のフレッシュユオイスターにまつわる「ラッセルでのギャルソン」とのやり取りを書いたもの。あちこちで贅沢をしていた訳だ。

贅沢と言えばワイン。『年長けてまた飲むべしと…』で「マーテンロートシルト」を詳述。また、シンガポールでインドネシア華僑に招待され振舞われた「シャアーペトリュス」は、生涯で飲んだ中で最高価のワインである。

遊びに関しては『記憶の中のゴルフ場』4回シリーズに、UAEドバイのエミレーツ等世界各地12カ所のゴルフ場を書いた。何回も行つた「柏ゴルフ」はもう無くなつてしまつた。また『IRまたはカジノ』にモンテカルロでかなり儲けた事を書いた。

総じて、書くことにより記憶が固定されるという利点がある。ただ、思い出すべき事項も、時と共にだんだんぼんやりとしてきこへるとも事実である。

* 太宰の『津輕』に出てくる乳母

(2025年11月13日)